

『アーサー・ラザフォード氏の遅すぎる初恋 THE WINTER VACATION』

著：名倉和希

ill：逆月酒乱

♪ 千紘

「チヒロ、そんなに緊張しなくても大丈夫だよ」

広いリビングのソファに並んで座っているエドワードから苦笑まじりにそう言われ、千紘は意識的に肩から力を抜いた。

「緊張しているつもりはないんですけど……」

「いつもよりかなり表情が固い」

「そうですか？」

エドワードが手を伸ばしてきて、千紘の頬をマッサージするように撫でた。ちょっと気持ちよくて目を閉じると、ふわっと唇に柔らかなものが触れてくる。目を開けば、エドワードのアップがあった。優しい栗色の瞳が笑んでいる。

「私の弟とその恋人は、君を取って食いやしないよ」

「それはわかっています。でも、その、エドの大切な家族になにか失礼があったらいけないと思うと……」

「君はじゅうぶんに準備をした。ゲストルームの清掃は何度もしたし、ベッドメイクも完璧だ。ディナーのケータリングの手配もちゃんとしたし、アルコール類はレストラン並みに各種取りそろえている。仕事をしながらこれだけの用意をした君は凄い」

「僕は秘書です。こうした段取りは得意なので、このくらいのことは別にたいした労力ではありません」

「そうか？ 私が軽い気持ちでクリスマス休暇に弟カップルを自宅に招きたいなんて言ったものだから、君に面倒をかけさせてしまった。大変だっただろう。すまなかった」

両の眉尻を下げて情けない顔になったエドワードに、千紘は「エドが申し訳なく思うことなんてありません」と慌てた。

「ディナーをケータリングにしようとしたエドが提案してくれたので、ずいぶん楽をさせてもらいましたし、僕が勝手に、できるだけのおもてなしをしようとした張り切っただけです。アーサーとトキに会うのを楽しみにしていたのは嘘じゃありません」

千紘はエドワードの頬にキスをして、たくましい胸にもたれかかる。優しく背中を撫でられて、心地よさに目を閉じた。

十二月二十四日の今日、エドワードの弟アーサーが、恋人を連れてやってくることになっている。緊張するなと言われても難しい。

千紘自身、はじめての恋人と、はじめてクリスマスを過ごすのだ。なんて素晴らしいことだろう。おまけにアーサーに会えるなんて——いや、合わせてもらえるなんて。

妹のアレックスには会社で何度も会っているが、弟のアーサーははじめてだ。NYで同棲している恋人もいっしょに遊びに来る。その恋人はなんと日本人だ。ひさしぶりに日本語で会話ができるかもしれない。

とても楽しみだけれど、どうしたって緊張はしてしまう。エドワードがなんとか千紘の気持ちを解そうとしてくれるが、それとこれとはちがうのだ。

(アーサーは、話に聞くかぎり、とても有能なビジネスマンみたい。でもエドとアレックスでは、評価が分かれるんだよね……)

エドワードはアーサーのことを「自慢の弟」と言う。子供のころから成績優秀でスポーツ万能、リーダーシップを取れ、あらゆる面で人より抜きん出ていたらしい。自分よりデキのいい弟に嫉妬するのではなくきちんと認めて自慢に思うなんて、エドワードらしいなと微笑ましい気持ちになる。

逆にアレックスはアーサーのことを「下半身がだらしない、ろくでもない男」とこき下ろす。品行方正なエドワードを崇拝するアレックスは、十代のころから恋人をとっかえひっかえして交友関係が派手だったアーサーを、あまり好きではないらしい。けれどビジネスマンとして有能なのは認めざるを得ないようで、憎々しい感じで「あれで仕事が出来なかったら縁を切っていたレベルのバカ」と言い切った。

写真で見るアーサーはたしかにハンサムで男の色気があってモテるだろうな、仕事が出来そうだな、と思わせるものがある。恋人がいない状態でアーサーと出会い、誘われたとしたら自分はどうするだろう、と千紘はちょっと想像してみた。エドワードと知り合うまえならば興味本位でふらふらとついていったかもしれない。ルックスの魅力だけでなく、尊敬する部分があるからだ。

アーサーは十代後半にゲイであることをカミングアウトしたそうだ。その点を千紘はすごいと思う。千紘は自分が同性に恋愛感情を抱くマイノリティだと自覚がありながら、この年までだれにも言えず、だれにも知られないように隠して生きてきた。だからアーサーの勇気を称賛したい。

しかし、いまの千紘はエドワードがすべてなので、たぶん目の前に立たれても心は揺らがない。あくまでもエドワードの弟として対峙するだろう。そういう根拠のない妙な自信だけはあった。

秘書としての性なのか、千紘は時広についてもできるだけ調べた。人となりを知るのに、簡単な生い立ちや最終学歴、職業を把握しておくのは有効だ。

時広は千紘より三歳年上で今年二十九歳になる。子供のころに両親と死別しており、祖母に育てられた。この点では千紘と似たような生い立ちだから、共感できるところがあると思う。ただ、哲也のような従兄はいなかったようだ。

時広とアーサーとの出会いは、去年の東京。元教師という経歴から、アーサーが日本支社に赴任したとき、日本語教師として推薦されて出会っている。二人のあいだにどんなドラマがあった

のだろうか。遊び人のアーサーは時広を深く愛するようになり、彼一筋になった。

今年の夏にフィンランドの別荘でいっしょにバカンスを過ごしていたのも、この時広だ。エドワードは夏にフィンランドで会っている。そのときの写真を見せてもらった。とても年上とは思えない、あどけない笑顔をした小柄な日本人が写っていた。そのとなりにいるアーサーはリラックスした表情をしている。百戦錬磨のアーサーを手練手管で落としたわけではなく、そのまっすぐさで虜にしたのかもしれない。

エドワードは彼のことを「アーサーを真剣に愛してくれている、純粹な人だ」と言っていた。仲良くなれるといい。

時計を見て、もうすぐ到着する時間だなと思うと、やはりそわそわと落ち着かない。定刻通りに飛行機は到着したと連絡があった。そこからタクシーでボストン市内まで移動したとしたら、本当にそろそろ――。

「あ、着いたかな」

エドワードがリビングの窓から外を見て、表にタクシーが停車したことに気付いた。

いよいよだ、とドキドキしながらエドワードと連れだって玄関へ行く。インターホンが鳴らされる前に、エドワードがドアを開けた。

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>